

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書評：

新江利彦著 『ベトナムの少数民族定住政策史』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4591

書評

新江利彦著『ベトナムの少数民族定住政策史』東京、風響社、2007年2月、438頁、

樫永真佐夫（国立民族学博物館）

この筆者の旺盛な知識欲とあり余る行動力には、目を見張るものがある。過去10年以上にわたって筆者は、越文、漢文、チャム文、英文、仏文の諸資料を博捜し、ベトナム、ラオス、カンボジアが国境を接するベトナム中部高原に居住する諸民族の村々を自らの足で訪ね、ベトナム語、チャム語その他の言語を駆使して、人々の土地利用と移住の歴史を精査してきた。そうした基礎研究の上に、ダム建設をめぐる住民の移住問題への応用を目的として書かれたのが本書である。

中部高原は、モン・クメール語系、マレー・ポリネシア語系などに属するたくさんの民族が、19世紀以前から焼き畑耕作を主とする生業を営んできた地域である。人類学徒には、とりわけコンドミナスの民族誌『森を食べる人々』[コンドミナス 1993]で知られている。1940年代にコンドミナスがムノン族村落における一年の生活誌を描いたあとには、ヒッキー（G.C Hickey）がベトナム戦争中に長期滞在し、エデ族、ジャライ族をはじめとする諸民族のエスノヒストリーとして4冊の大著の形で成果をまとめている[Hickey 1982a, 1982b, 1993, 2002]。これら先達も扱い得なかった漢文、チャム文資料をも十分に活用し、ベトナム語、チャム語をはじめとする堪能な多言語能力を生かして現地の老若男女から情報を収集することで、本書の筆者は独自の地域社会誌の記述に成功した。

チャンパー、クメール、ベトナム、ラオスという諸国家の狭間にあった前近代の中部高

原が、「火の王」や「水の王」と呼ばれる儀礼執行者でもある首長たちによって緩やかに政治統合されていたにすぎないとはいえ、この地域の社会が伝統的な無文字社会といったイメージとはかけ離れ、塩、甕、銅製品をはじめとする交易ネットワークを通じて外部社会と経済的につながり、また外部の大きな政治権力の圧力に対応して変化してきた。こうした社会の動態はコンドミナスやヒッキーも、もちろんすでに指摘している。しかし本書の特徴は、それをさらに一歩進め、「海のシルクロード」の交易で繁栄を誇ったチャム族が建てたチャンパー王国（西暦 1000 年～1832 年）の重要な経済基盤の源として、中部高原住民が19世紀以前から支配を受けていたことを実証的に明らかにした点にある（本書2章）。また、本書の表題は「定住政策史」となっているが、政策の推移を追うにとどまっているわけではないのも本書の特徴である。政策の施行に応じて現地住民がどのように生活環境を変化させようとしてきたか、現地社会の歴史的、文化的、経済的背景を踏まえて詳細に記述しているのである。さらに記述の通り、現地住民の経済的社会的損失を最小限に食い止めつつ、ダム建設を中心とする中部高原の開発事業を進めるにはどうしたらいいか、ベトナム政府に対して具体的方策を提言するところまで本書は踏み込んでいる。その意味でアグレッシブに実践的である。

本書の構成とポイントを、評者なりにいかに整理しておこう。本書は6つの章と付録からなる。

序章では、まず、ベトナム中部高原における二つの灌漑事業地域（コンオ山塊とカロン溪谷）を例として、国家の開発計画と環境計画の実現のために行われる先住少数民族の定

住事業と再定住事業が彼らの社会に与える影響を考察することであるとして、目的が示される [p. 19]。

ベトナム戦争時代に南ベトナムで焼き畑は兵糧確保手段として重要視されていた。しかし 1976 年にベトナム社会主義共和国が成立すると、平地の人口圧を減らし、農業生産を増進する必要から山地へ開拓民を入植させるために焼き畑休閑地を収容する必要が生じた。そこで 1977 年に、焼き畑禁止、定着農業への転換、先住少数民族占有資源の国有化、定住区への集住を目的とした第一次定住化が政府主導で推進された。さらに、ベトナムの市場経済化政策が軌道に乗り始めた 1990 年からは、森林保護のための環境保護や、灌漑事業などの生産基盤の整備を目的とした第二次定住化も推進された。焼き畑による移動生活を伝統として認識してきた住民の視点を排除した政策によるこうした強制は、FURLO という反政府勢力による活動の伸長を招き、また 2001 年と 2004 年に起こった暴動の潜在的根拠ともなった。これに対して筆者は、1998 年に中部高原でダイニン水力発電所を建設した際に現地住民の信仰を集めている 16 世紀のポーケイダブ祠堂跡地を破壊して大きな遺恨を残した例を引き、現地言語に通じ現地住民の社会環境に配慮した開発計画を策定する必要性を強調する。とりわけ長期定点観測を旨とする文化人類学や民族学の調査を行ったうえで、住民参加で開発事業の計画を策定し、実施することの重要性を筆者は訴えるのである。

1 章から 4 章が本論部分である。1 章「中部高原における少数民族政策の形成」では、まず当該地域の歴史を、1, チャンパー時代 (1000–1693)、2, ベトナム阮朝時代 (1693–1888)、3, 仏領時代 (1888–1945)、4, インドシナ戦争時代 (1945–1954)、5, ベトナム戦争時代 (1954–1975)、6, 社会主義化時代 (1976–1990 年頃)、7, 市場経済化時代 (1990 年頃)

～）に7区分する。次に時期ごとに中部高原における土地政策を追う。

「4、インドシナ戦争時代」までチャンパー、ベトナム、フランスによって現地首長たちによる自治を約束されていた中部高原社会は、ベトナム戦争時代以降、親南ベトナム・親アメリカ勢力、親北ベトナム勢力、親カンボジア・FULRO 勢力の三つ巴の内戦にさらされる。次いで「6、社会主義時代」以降は、敵対関係にあったカンボジアと国境を接する中部高原の治安維持を図る目的もあって国内植民が緊急課題となった。以来30年にわたって平地からの移民と先住民の定住化が進められ、現在では中部高原人口500万人のうち、19世紀以前からの先住少数民族は200万人に過ぎない。筆者は2001年暴動と2004年暴動の原因と経過を述べたあと、ベトナム戦争時代以降土地を失い続けてきた現地先住少数民族たちの不満を緩和するには、効率的に使用されていない土地・山林を国有林から外して彼らに分与するしかないと結論する。

2章「チャム王家の中部高原支配」では、チャム写本と漢文資料に基づき、チャンパー時代からベトナム阮朝時代におけるチャム王家と阮朝による中部高原に対する税政を中心に、この地域の歴史的、文化的背景が明らかにされる。チャンパーがすでに滅んでいた19世紀になると中部高原住民がチャム王と呼んでいるのは、実際には阮朝が派遣するチャム人徴税官のことであった。チャンパーも阮朝も中部高原地域の住民に対して人頭税を課したが、徴税官は人頭数を実際よりも少なく記入することで現地住民に恩を売り、塩、甕、銅製品の有利な商取引をすることで、長期にわたる安定した「チャム王による支配」は維持されていた。こうした前近代の中部高原支配の実態を、筆者は18、19世紀の文書とチャム王家の末裔からの聞き取りから明らかにした。

3章と4章が事例研究である。3章「灌漑事業の恩恵が受けられない人々」では、コンオ山塊のダテ灌漑ダム建設事業の影響を受けるマー族住民の例を取り上げる。第一次定住化でダテ川溪谷に4000人の多数民族キン族を平地から送り込み、先住のマー族約1000人の定住化と氾濫田における水田開発が始まった。しかし、例年の不作による食糧不足で定住区は破綻し、1982～1983年頃にはマー族農民たちの半分以上が焼き畑山に回帰してしまった。1990年に始まる第二次定住化のあと1996年にダテ灌漑ダムが完成したが、マー族の水田は優先灌漑地域からはずれ、灌漑の恩恵を受けることさえなかった。焼き畑耕作を禁止された人々は、竹を取り箸工場に売って日銭を稼いだり、サトウキビなど商品作物栽培を導入したりして現金収入の確保に生存戦略を見いだすしかない。一方、コンオ山塊に隣接する地区では、政府がコーヒー栽培を奨励し、現地民もそれによって1990年代は成功して富を得た。しかし2000年には生産過多によって価格が暴落し、その人々も貧困と飢餓に直面するか、借金まみれの状態に転落した。このように先住少数民族の集住定住化促進、大規模な入植事業、長期的な視野を欠いた営農計画といった政策上の問題が、2001年の暴動へと人々を駆り立てた。現在コンオ山塊のマー族は、隠れ焼き畑で陸稲を作ったり、マラリアに罹患する危険を冒しながら竹を採取して売って、生活をかろうじてつないでいるが、長期の持続可能性は期待できない。

4章「灌漑事業の享受を拒絶する人々」では、カロン溪谷に居住しているラグライ族、コホー族が、ファンリ・ファンティエト灌漑事業で新たに灌漑される地域への入植を勧奨されているのに、2000年以来一貫して拒み続けている理由と背景を考察する。1970年代の第一次定住化の時期に、現地のラグライ族、コホー族に移住を省が奨励しておいて彼らが

去ったあとにはキン族を入植させた。せっかく落ち着いた新しい定住先も、その地域が1982年に下流に作られる水源保全林に指定され、代替農地に退去させられた。しかし、そこも2007年にダム建設の着工することが決まっていた。政府は低地への移住と灌漑事業の恩恵を約束しているが、他品種栽培によって柔軟にリスクを軽減できた伝統的な焼き畑による巡回農法を禁止され、強制的な移住と定住を繰り返させられた人々の心の傷跡は深い。これまでの経験で政府や平地のキンに対する不信感、水稲と換金作物のみに依存することへの危機意識もあって、彼らは灌漑の恩恵が受けられる新天地への移住を拒否している。彼らが求めているのは、1982年に放棄した旧村地域の水源保全林の指定を解除し、農地として再供与されることである。

終章では、1970年代以来の定地定耕政策の問題点をまとめた上で、中部高原地域開発のための提言を行う。すなわち、先住少数民族のアイデンティティの根拠でもあり、リスク回避型の複合農業である焼き畑巡回耕作を、一方的に低能率で環境破壊型農法と決めつけて定住させ、水稲や商品作物のモノカルチャーに生業を転換させようとした点に定住化政策の問題点はあった。そこで筆者は、先住少数民族の非定住を許容する新しい農村開発の模索、山林資源の管理権・用益権の分与、非木材生産物の生産・販売支援、山林や既存農地の有効利用、医療支援、農村金融システムの整備、教育の充実などにより、現地の人々が山の恵みを享受できる制度を整える必要性をベトナム政府に対して訴える。開発計画、環境計画においても住民を排除するのではなく、住民参加を前提として実施されることを求める。山路永司による「推薦のことば」[p. 1-3]を借りると、「わたしたちが今日目にするベトナム・東南アジアのダム水源地域の山岳少数民族の窮状は、水源地域における農村計

画・営農支援の失敗がもたらしたものである可能性が高い。少数民族農民の営農努力が不足していたからでは決してない」ことを知ったからである。

ベトナムにとって日本は重要な政府開発援助供与国であり、大規模開発事業の多くが日本の援助なしには実現しない。そこで東南アジアの土木開発事業やそれに伴う移住問題に関心を持つすべての人に、筆者の提言を吟味、検討し、新しい共生の可能性を考察することを勧めたい。のみならず、随所にちりばめられている中部高原のエスノヒストリーや民族誌的知見は、人類学者、民族学者の興味をもひくことであろう。付録にも、コンオ山塊における系譜の口碑、カロン溪谷における伝統祭祀、カロン住民の漢字姓名に関する考察などが含まれ、母系親族、儀礼祭祀、民族間関係などに関する貴重なデータが追加されている。

もちろん評者にとって、本書の記述に不満がないわけではない。たとえば構成上の問題が散見される。たとえば、2章を19世紀の中部高原住民に対する税制の話で締めくくったあと、3章でいきなり1990年代の第二次移住化に対するマー族住民の対応の話が始まるのはやや唐突である。また、ベトナムにおける公的民族分類の問題点が、3章の途中に挿入されているが、これは序章に入れた方がよかった。このように時系列が前後したり、大局的な話と局地的な話が前触れなく行き来したりという不協和は、むしろ筆者が自身の過剰な知識をいかに整理するかに苦悶した痕跡なのであろう。かなり苦勞して整理したに違いない36枚の図が本文中でほとんど説明されていないのも、文章をまとめるだけで力尽きた証かもしれない。以上のような欠点ゆえに、本書は中部高原の民族・歴史・文化に関する

る基礎知識を持っていないとやや読みにくい。残念である。その点でヒッキーの実によく整理された民族誌に対して見劣りがする。それでも、社会主義化時代以降の中部高原先住少数民族が生きぬくための闘争を実に生々しい筆致で描いている点は、決して引けを取ってはいない。

引用文献

ジョルジュ・コンドミナス

- 1993 『森を食べる人々：ベトナム高地、ムノング・ガル族のサル・ルク村で石の精霊ゴオの森を食べた年の記録』（橋本和也、青木寿江訳）東京：紀伊國屋書店
(Condominas, Georges 1974 *Nous avons mange la foret de la Pierre-Genie Goo: chronique de Sar Luk, village de Mnong Ggar, tribu proto-indochinoise des Hauts-Plateaux du Viet-Nam central = Hii saa brie mau-yaang Goo*, Paris : Mercure de France)

Hickey, Gerald Cannon

- 1982a *Sons of the mountains : Ethnohistory of the Vietnamese central highlands to 1954*, New Haven : Yale University Press
1982b *Free in the forest : Ethnohistory of the Vietnamese central highlands 1954-1976*, New Haven : Yale University Press
1993 *Shattered world : Adaptation and survival among Vietnam's highland peoples during the Vietnam War*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
2002 *Window on a war : An anthropologist in the Vietnam conflict*, Lubbock, Tex. : Texas Tech

書評 (執筆者: 檜永)

University Press